渡辺一夫著作集 3

筑摩書房

渡辺一夫著作集3　ルネサンス雑考　上巻

一九七〇年八月三十日　初　版第一刷発行
一九七七年二月　十　日　増補版第一刷発行

著者　渡辺一夫
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話　東京二九一―七六五一
郵便番号　一〇一―九一
振替　東京六―四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　和田製本工業株式会社
©渡辺芳枝一九七七

(分類)1398(製品)74803(出版社)4604

ルネサンス雑考　上巻　目次

端　書……3

A　ルネサンス弄筆（一九二九年―一九六九年）

Geoffroy・Toryのこと……7

歴史的名句について……11

アンリ四世の首の行方……16

「胎児監理人」の話……24

サンス館（やかた）のマルゴ王妃……40

昔噺・恐ろしい大学教師の話……60

悪者（ピーカロ）の心……66

『太陽（オウイダス・ソリス）の都』のこと……71

ルネサンス的「洗脳」の一例……73

n・r・f刊行の『ルネサンス叢書』について……80

B　ルネサンス雑録（一九二六年―一九五八年）

フランス・ルネサンスの特徴……91
フランス・ルネサンス文学について……121
フランス・ルネサンスのユマニスムについて……147
「BLASONS集」覚書……169
モリス・セーヴの影法師……179
ヴァレリ・ラルボーの『モリス・セーヴ論』……209
フィリップ・デポルト管見……219
ノエル・デュ・ファイ小論……259
十六世紀「本格喜劇」の世界……283
フランス・ルネサンス喜劇の使命……340
「女性論議」Querelle des femmesについて……354

索引……巻末 1
別刷　主要人物表……巻頭
一五三〇年頃の Paris……巻頭

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ルネサンス雑考　上巻

端書

『ルネサンス雑考』は上・中・下の三巻に分たれるが、本上巻には、求められるがままに思いついて書き綴った随筆風の雑文を、A「ルネサンス弄筆」として、ひとまとめにし、若干論文めいた雑録を、B「ルネサンス雑録」という小見出しのもとに集めた。配列は概ね各雑文の内容の時代順に従った。

私が、フランス・ルネサンス文学を齧り始めたのは、大学卒業直後一九二六年頃からのことであり、その頃からの雑文雑録類を本『ルネサンス雑考』上・中・下に再録することになったのであるが、昔の文章は、いずれも、資料の不備や記述法の拙劣さや、また特に私自身の理解力の浅さ鑑賞眼の低さのために、決して進歩しているとは思われぬ現在の私から見ても、幼稚粗笨なものであった。顧問格の二宮敬氏の強い要請によって、「がらくた博物館」行きと思われるような雑考なども敢て収録することに決意したのは、世の研究者の方々の御参考に供するためというよりも、私自身が、ある時期に、このようなことと取り組んでいたという思い出を新たにして、いたらぬ我が身を省みたいという虫の良い勝手な気持が湧いてきたからである。勿論、この種の雑文の類を新たに収録するに当っては、原型を損じない程度の加筆訂正を施したから、旧稿に比してやや体裁だけは整えられているかもしれない。

本来、私は、フランス・ルネサンス文学全般に関して、専門的な調査研究を行う暇も能力も持っている筈はないのである。それにも拘らず身のほども省みずに間口を拡げたのは、いつの頃からか私を捕えてしまったフランソ

ワ・ラブレーのせいであった。ラブレーは、私などには、とうてい歯が立たぬ大きな存在であることは、今になってよく判るのであるが、齧れば齧るほど色々様々な味いがするようにも思ったことも事実である。そして、なるべく沢山齧って色々な味いにあずかるようにするためには、ラブレーが生きていた時代のことや、その周辺の人々の消息などをなるべく沢山に一応心得て置くほうが便利だと考えたのである。その結果、拡げた間口から、臆面もなくフランス・ルネサンス文学へはいりこみ、眼につくものを、手当りしだいにいじくりまわしてしまった。こうして様々なものを弄んでいるうちに、それまで味う術もなかったものがラブレーから味い取られた場合もあったし、それまでの味い方が変だったということを教えられることもあった。従って、このような遣方、即ち、ラブレーに接近するために、ラブレーの周辺を歩きまわるという遣方は、それ自体、決して悪くはなかったとは思っている。しかしながら、私自身の能力に限界があるために、また十分な余暇もなかったために、ラブレーについても、所謂専門的な研究は結局はできなかったし、その周辺についても、ただ漫歩的な調査しかできなかったのである。つまり、虻蜂取らずになってしまったのである。やむを得ぬことであった。本『ルネサンス雑考』上・中・下は、結局、ラブレーに少しでも接近しようとして、その周辺を歩きまわっていた私の貧弱なノートの集積にすぎない。

なお、本巻冒頭に、「主要人物表」なるものを掲げたが、これは、本『ルネサンス雑考』全体に収められた雑文雑考中で主として取り扱われた主要人物をならべただけのものである。多少なりとも、読者の興味を惹くことができたら幸甚である。十六世紀文学全体に関する「略年表」は、下巻巻末に添えるつもりである。なお巻末索引は、蘆野徳子嬢の御厚志によって編まれた。お礼申上げる。

一九七〇年二月

渡辺一夫識

A　ルネサンス弄筆（一九二九年―一九六九年）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

Geoffroy・Toryのこと

去年ルゥーヴル展と称せられたフランス美術展が、東京を初めとして日本の主要都市で開かれたことは、皆様の御記憶にあると思います。その時、国立博物館に勤めて居られる嘉門安雄氏や秋山光和氏のお勧めで、右展覧会に陳列されることになっていたフランス古書について、現物を見ないうちに何か書かされることになり、大いそぎでしらべて、拙い文章を綴りました。その折、秋山氏は、Geoffroy Tory の "Champfleury……" もくるらしいから……と言われましたので、拙文の終りに、〔附記〕として、一五二九年版の『シャンフルリー』(『万華園』) が到着するならば、正に一大事件 (!?) であるから、唾(つば)を呑んで期待しているというような意味のことを書きました。

ところが、いざ展覧会が開かれて、カタローグをいただき、しらべてみると、一五二九年の初版の『シャンフルリー』が、確かに来ていることが判りました。僕は、上野の博物館の「ルネサンスの部」の入口近くの硝子(ガラス)張りの飾棚に、柔かい光を浴びて、『シャンフルリー』が、美しく古雅な活字を乗せたページを開いたまま、横たわっているのをこの眼で確かに見届けました。『シャンフルリー』がくるかもしれないと言われて唾をのんだ僕は、現に眼前にその美しい肢体を見せている『シャンフルリー』に釘付けになったまま、新たに唾を呑んでしまったのです。もしできたら、この本を手に取り、その重さを楽しみ、匂いを嗅ぎ、撫でさすり、嘗(な)めまわしたことでしょう。

一五二九年版の『シャンフルリー』は、フランスの十六世紀文学語学を齧っている僕にとっては、一つの夢想の

メッカ（聖地）だったのです。なぜならば、当時ゴチック字体活字による印刷を却けて、優美なローマ字体の活字で印刷された最初の傑作が、この一五二九年に上梓された『シャンフルリー』だったからですし、その上に、この本の第一部に論ぜられたフランス語の綴字法、特に Accents や cédille や apostrophe に関する主張は、フランス語学史中でも、国語確立運動の先陣を承ったものとして、記憶されてしかるべきだったからです。

題の『シャンフルリー』とは「花咲ける野辺」の義ですが、序文を見ますと、「フランス語を美しく整備する努力を皆でやれば、いずれ、思うことを立派にやさしく言ったり書いたりできるような、美しく好ましく且つ薫りの高い花の咲き乱れた詩歌と修辞との広々とした野原に出られるだろう」と書いてある通り、「言葉の花の野」「辞苑」というような意味であることが判ります。(cf. Mélanges offerts à M. E. Picot, *Damascène Morgand*, t. II, p. 556)

なお、この本の全標題は、十六世紀の多くの書物と同じく、次のようにずいぶん長いのです。

Champfleury, auquel est contenu l'art et science de la deue et vraye proportion des lettres attiques qu'on dit autrement lettres antiques et vulgairement lettres romaines proportionnées selon le corps et visage humain.

『花咲ける野辺、これに収められしは、人体の体軀及び顔面の比例より割出されたるアッチカ字体、別名アンチーク字体、俗称ローマ字体の適切正当なる釣合いに関する技法と論考』

○

作者のジョフロワ・トーリーは、一四八〇年頃、フランスのブゥルジュ Bourges で生れましたが、青年時代にイタリヤに遊学し、ローマ、ボロニヤなどで、新しい時代、ルネサンスの空気を存分に吸ったようです。一五〇五

年に帰仏し、パリで教鞭を取る身となりましたが、一五一六年頃に再びイタリヤへ赴き、活字印刷、造本技術、版画技術などを詳しく見聞して、ほどなく帰国しました。一五一八年に、パリのプチ・ポン Petit-Pont 地区に店を開き、書物を売る傍ら、版画師としての生活を始めました。彼の全身全霊に宿った夢の一つが、生きた肉身に結実したわけでしょう。こういう場合、人間は、いくら苦しくとも、恐らく一番生甲斐を感ずるに違いありません。一五二六年に出版業を営む認可をも与えられて、トーリーの夢は着々と実現してゆきました。即ち己の理想に従った美しい印刷本が続々と出版されることになったからです。一五三〇年には、「王室附印刷師」Imprimeur du Roy という称号を与えられ、パリ大学所属「第二十五番目書肆」という資格も得ましたし、一五三三年には、「誓約書肆」Libraire juré（これは書肆組合の諸規則を厳守する旨を誓い、これを認められた書店の義であり、組合公認書店と呼んでもよかろうかと思います。）として認められましたが、この同じ年一五三三年に他界してしまいました。

『シャンフルリー』は、一五二九年四月二十八日附で出版されたのですが、ジョフロワ・トーリー書店と、パリで同じく有名だったジール・（ド）・グルモン Gilles (de) Gourmont 書店との共同出版になっています。なお、ジョフロワ・トーリー書店の商標乃至招牌は、Pot cassé「破れ甕（がめ）」でした。これは、版画用の錐（きり）で貫かれて半ばかけた遺骨壺の絵で表現されています。この商標は非常に有名になり、今日でも、フランスの本屋が、一寸しゃれた本を出す時など、或はカットとして或は叢書名として用いていたことがあるくらいです。なお、記銘としては、Non plus という短句が撰ばれましたが、その義は、よく判りませんが、「またなし」「既になし」「同じくなし」とでも訳せるかもしれません。こうした商標や記銘を作ったについては、一つの挿話があります。恐らくプチ・ポン地区へ開業した頃、トーリーは、その最愛の娘 Agnès アニェスを失い、悲嘆に暮れ、こうした遺骨壺の図柄を撰んだと言われます。版画用の錐が突き刺さり、半ばこわれた形にし、Non plus というような銘句を撰んだ理由は、色色に解せますが、次のようにも考えられないものでしょうか？

「最愛の娘アニェスは死んだ。病魔に冒されて死んだ。後に残された自分は、悲しみのために、自分もまた生きている気はしない。アニェスの遺骨を納めた壺が自分であり、版画の魔に冒され、その錐に貫かれた壺が自分であろう。生きながら死んでいるとも言える自分は、宿命の錐、我が夢想の錐に貫かれた破れ甕として、生ならぬ生、我が夢想のみに生きるであろう」というような風に。

しかし、この解釈は、僕の妄想であり、少し自惚れて言えば、僕らしからぬ詩的情緒をたたえています。こんな妄想を逞しゅうしたのも、過ぐる秋の日、上野の博物館で、『シャンフルリー』の麗姿を、無情な硝子越しに垣間見て、唾を呑んだ結果でもありましょうか？（1955）

歴史的名句について

——三宅徳嘉氏に——

第二次大戦の折、ナチ・ドイツ軍の軍門に降ったペタン元帥は、昔から伝わっている「すべては失われた、名誉を除いては」Tout est perdu, sauf l'honneur. という《名句》？ を再び用いたことを御記憶の方々もあることでしょう。この《名句》は、一五二五年二月二十四日（金曜）に、イタリヤのパヴィヤの戦で、フランス国王フランソワ一世軍がドイツ皇帝軍のために大敗北を喫し、王自身も捕虜になるという事態になりましたとき、その悲報を、王が書面をもって祖国へ報知する際に用いた《名句》だということになっております。負け惜しみめいたところもなくはありませんが、武士道はなやかなりしころの幻の一片が感じられなくもありません。しかし、ほんとうに、フランソワ一世が、「すべては失われた、名誉を除いては！」と書いたかと申しますに——フランソワ一世の残した書簡類を全部調査しない限り正確なことは申せませんが、——必ずしもそうではなかったのかもしれないのです。『フランソワ一世治下のパリ一市民の日記』Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François Ier という筆者不明の記録によりますと、ドイツ皇帝軍の捕虜となったフランソワ一世は、クレモーナ近くのピッツィゲトーネの城塞へ護送される際に、一通の書面を故国なる母太后ルゥイーズ・ド・サヴォワへ送り、上掲の《名句》によく似た文章、「すべてのものから自分に残されたのは、品位（名誉）と無事だった生命とだけである」De toutes

choses ne m'est demeuré que l'honneur et ma vie qui est saine. と記しているのです。(cf. Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François Ier, *Ed. V. L. Bourrilly, Picard*, 1910, p. 199) 捕虜とは言え、ともかくも、一国の王として待遇されたことは、《名誉》が保たれたことになりますし、《無事だった生命》と付言してあることも、フランソワ一世としては当然の感慨でありましょうが、「すべては失われた、名誉を除いては！」という簡潔な《名句》とは、だいぶ距離があるように思われます。母太后宛のこの書面の文章（前掲）から、ペタン元帥によっても用いられることになる《名句》が生まれたとするならば、フランソワ一世王に対する同情から、《歴史》が、上記のような書面の文章を、少しずつ純化し美化して、《名句》化してしまったと考えることも可能でしょう。こうした《名句》化を受けた多くの言葉がありましょうが、次の場合も、もう一つの例となるかもしれません。

いま記しましたフランソワ一世を中興の祖とするヴァロワ王朝も、十六世紀後半になりますと、宗教戦乱の渦中に陥り、しかも断絶することになりました。この王朝の最後の王アンリ三世（フランソワ一世の孫に当たる）が、一五八九年八月一日に、狂信的な旧教徒ジャーク・クレマン Jacques Clément の手にかかって倒れますと、もはやヴァロワ王家には、王位継承権を持っている男子が一人もいなくなりましたので、フランス王位は、当時の慣習法サリカ法によって、ヴァロワ王家にいちばん近いブゥルボン王家の当主アンリ・ド・ナヴァール（ベアルン）Henri de Navarre (Béarn) (1553–1610) の掌中にころがりこんできました。

ところが、このアンリ・ド・ナヴァールは、新教軍の総大将でしたために、ローマ教皇からは当時破門宣告を受けていたばかりか、パリ市民もパリ大学ソルボンヌ神学部も、新教徒の国王には、反対の気勢を示しました。なお、歴代のフランス国王は、即位の折、カトリック教会において戴冠式を行なうのを習慣としていましたから、新教徒

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com